

## 日本国際文化学会第6回全国大会のお知らせ

2007年7月14日(土)・7月15日(日)

■会場 / 名桜大学

〒905-8535 沖縄県名護市為又1220-1

■主催 / 日本国際文化学会

協賛 / 名桜大学大学院国際文化研究科・名桜大学国際学部国際文化学科

■参加費 一般会員2000円 学生会員1000円

■懇親会費 一般会員5000円 学生会員2000円

お問い合わせ・参加申し込み

日本国際文化学会第6回全国大会実行委員会 名桜大学国際学群 仲地清

〒905-8585 沖縄県名護市為又1220

Tel 0980 51 1226・Fax 0980 54 0077

e-mail: k.nakachi@post.meio-u.ac.jp

### 第1日 7月14日(土)

9:00-10:00 常任理事・幹事会

10:00-12:00 自由論題

セッションA 国際化と教育

◎ 司会 永山寛雄 (名桜大学国際学群教授)

① 松尾隆司 (龍谷大学大学院国際文化学研究科博士課程)

「在日外国籍児童生徒の学習権保障についての研究－滋賀県における不就学児童生徒の調査を中心として」

② 金仙美 (東北大学大学院教育学研究科博士課程)

「異文化を生きる外国人子女と二重価値規範－ニューカマー韓国入子女の事例から」

③ 柏木貴久子 (関西大学外国語教育研究機構准教授)

「外国語教育からみる移民問題－ドイツの場合」

④ 井上央子 (筑波大学大学院社会科学研究科博士課程)

「所有をめぐる実践－フィリッピン人の子供が生きる意味世界」

セッションB アジアのコミュニティの歴史と創造

◎ 司会 中村誠司 (名桜大学国際学群教授)

① 菅野敦志 (早稲田大学アジア太平洋研究センター助手)

「台湾における社区総体營造とコミュニティの歴史」

② 林麗英 (龍谷大学大学院国際文化学研究科修士課程)  
「台湾産地の主要伝統作物－民族的な農耕生産からみたアワの利用形態」

③ 嘉納英明 (名桜大学国際学群准教授)  
「沖縄の集落共同体における子どもの学習支援－宜野座村惣慶区の学習会成立」

④ 松本年史 (東北芸術工科大学建築環境デザイン科教授)  
「雪と氷を利用した街づくりの活動と雪の建築の可能性について」

セッションC 国際化時代の言語問題と言語教育

◎ 司会 内間 直仁 (名桜大学国際学群教授)

① 寺尾智史 (京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程)  
「ヨーロッパにおける少数言語保全運動とCEFR (欧州言語共通参照枠)」

② 宮城信雄 (琉球大学教育学部附属小教諭)  
「琉球方言論争の一考察」

③ 村上めぐみ (龍谷大学大学院国際文化学研究科博士課程)  
「中国雲南省緑春県ハニ族の世界認識に関する研究－生活語彙の語彙素分析を中心として」

④ 与那覇恵子 (名桜大学国際学群准教授)  
「『英語村』を通しての韓国の英語教育に関する考察」

セッションD 国際社会を分析する新しい視点

◎ 司会 大城 美樹雄 (名桜大学総合研究所専任所員)

- ① 比嘉理麻 (筑波大学大学院人文社会科学研究所博士課程)  
「バザール経済論からとらえる沖縄の市場 (イチバ)」
- ② 溝口佳代 (龍谷大学大学院国際文化学研究科特別専攻生)  
「鶴見和子・共生の思想ーコモン・フェイスとその可能性」
- ③ ハイジ・ゴーミ (スウェーデン・ゴテベルグ大学研究員)  
「文化の交差点で」
- ④ 小西正雄 (鳴戸教育大総合学習開発講座教授)  
「文化、世代継承、民主主義」

### セッションE 異文化交流の新しい接点

- ◎ 司会 渡慶次正則 (名桜大学国際学群准教授)
- ① 大西裕子 (立命館大学大学院国際関係研究科博士課程)  
「日本人の国際結婚における文化的要因ーアイデンティティと表象性」
- ② 胡 曉麗 (龍谷大学大学院国際文化学研究科修士課程)  
「大学生の就職に関する国際比較試論ー中国と日本を中心に」
- ③ 古川秀夫 (龍谷大学国際文化学部准教授)  
「ボランティア活動の比較文化論ー英国、中国および日本の大学調査から」
- ④ 朴 槿英  
(宮城工業高等専門学校総合化学系文科助教授)、デ  
ニル・ブシュパラル (東北大学大学院国際文化研  
究科准教授)  
「アジアの映像文化に現れる宗教と民族性の一考察」

### 12:00-12:30 理事会

### 12:30-13:30 フォーラム

#### 「沖縄県人会のネットワークを生かした南米現地実習ー名桜大学の試み」

- ◎ 司会 シャイヤステ・ファロック  
(名桜大学国際学群准教授)
- ◎ 報告 住江淳司 (名桜大学国際学群准教授)

### 13:30-15:30

#### 共通論題1 「現代社会における沖縄の心と癒し」

- ◎ 司会 山端清英 (名桜大学国際学群教授)
- ◎ 発表者 宮城良勝 (名護市勝山区長)  
「名護市のコミュニティービジネス構想」  
新里幸照 (名桜大学国際学群教授)  
「宮古歌謡の価値」  
吉川安一 (名桜大学国際学群教授)  
「沖縄の新歌謡「芭蕉布」の創作背景」  
高宮城 繁 (名桜大学人間健康学部教授)  
「沖縄空手の真髄」

#### 共通論題2

#### 「中間系の諸問題 - 東南アジアにおけるマジョリティーのエスニシティー」

- ◎ 司会 合田 濤  
(神戸大学大学院・国際文化学研究科・教授)

#### ◎ 発表者 合田 濤

- (神戸大学大学院・国際文化学研究科・教授)  
「問題の所在と分析視角ー中間系と三角柱モデル」
- 伊藤 眞 (首都大学東京・都市教養学部・教授)  
「インドネシアにおける新華人の形成ーマカッサルの事例からー」
- 石井真夫 (三重大学・人文学部・教授)  
「東マレーシア、サラワク州の"中規模"民族集団ー地方政治の中でー」
- 長坂 格  
(新潟国際情報大学・情報文化学部・准教授)  
「マニラの地方出身紙器工場経営者の生き残り戦略ーエスニック、ニッチ形成の事例ー」
- 遠藤 央 (京都文教大学・人文学部・教授)  
「マレーシア映画 (マレー語映画) 産業史とマレー・エスニシティの形成」

#### 共通論題3 「植民記憶の公共性について」

- ◎ 司会 川村 湊 (法政大学国際文化学部教授)
- ◎ 発表者 藤巻光浩 (静岡県立大学国際関係学部准教授)  
「沖縄海洋館における海洋文明の展示と本土復帰の記憶:文化交流(コミュニケーション)とその公共性について」
- 奥田孝晴 (文教大学国際学部教授)  
「歴史比較を通じて担保することができる公共性とは:東アジア教科書編纂研究会から」\*
- 椎野信雄 (文教大学国際学部教授)  
「近代の記憶としての『日本史』をアンラーンー公共の中の『公』と『共』ー」
- 若林一平 (文教大学国際学部教授)  
「歴史記憶の弁証法」

\*発表者に加え、共通歴史教科書編纂研究会に参加しているアジアの留学生および日本人学生の参加を予定しています。

### 16:00-18:00

#### 共通論題4

#### 「沖縄と世界の関係 - 国際化時代の沖縄人の生き方」

- ◎ 司会 仲地 清 (名桜大学国際学群教授)
- ◎ 発表者 知念英信  
(前沖縄県世界ウチナンチュ大会事務局長)  
「世界ウチナンチュ大会の意義」  
山縣正明 (名桜大学大学院修士課程)  
「中国の西沙・南沙諸島占領の経緯と沖縄尖閣諸島を巡る類似性」  
仲地 清 (名桜大学国際学群教授)  
「国際政治における沖縄が内包する可能性」  
新里民雄 (宜野座村教育委員会課長)  
「地方自治と米軍基地」

## 共通論題5 「東アジア地域意識の展開と変容」

- ◎ 司会 長谷川雄一（東北福祉大学総合福祉学部教授）  
◎ 発表者 福島政裕（東海大学政治経済学部教授、日本公益学会）  
「東アジアの地域主義」  
白井実穂子  
（駒沢女子大学人文学部教授、日本公益学会）  
「EU から見る東アジア共同体」  
スヴェン・サーラ  
（東京大学大学院総合文化研究科准教授）  
「国際関係の変容と『アジア主義者』の『アジア』認識—興亜会から大亜細亜協会まで—」  
クリストファー・スピルマン  
（九州産業大学国際文化学部教授）  
「アジア主義の迷妄？—鹿子木具信から石原慎太郎まで—」

## 共通論題6

### 「文化表象としての世界遺産の〈世界性〉と〈ローカル性〉」

- ◎ 司会 大澤 暁（法政大学教授）  
◎ 発表者 中島成久（法政大学教授）  
「世界遺産のブランド効果—屋久島の事例より（企画説明に代えて）」  
斉藤文彦（龍谷大学教授）  
「文化表象としての世界遺産をめぐる権力関係—アフリカの事例より」  
安田忠典（関西大学准教授）  
「世界遺産百年前の熊野」  
松居竜五（龍谷大学准教授）  
「世界遺産としての京都—統括に代えて」

## 共通論題7 「次世代に残すアジアの文化と技術（2）」

- ◎ 司会 高橋禮二郎  
（東北大学大学院国際文化研究科教授）  
◎ 発表者 齊藤征雄（東北大学大学院文学研究科教授）  
「米糠をめぐるアジアの食文化」  
葉 剛（東北大学大学院国際文化研究科准教授）  
「経済学から見た雲南省の農業生産技術」

懇親会 19:00-21:00（ホテルゆがふいん）

# 第2日 7月15日(日)

## 9:30-11:30 自由論題

### セッションF 政治と文化の相関関係

- ◎ 司会 嘉納 英明（名桜大学国際学群准教授）  
① 福家崇洋（京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程）  
「ファシズムと『反動』-1920年代初期日本におけるファシズム受容について」  
② 桐谷多恵子  
（法政大学大学院国際文化専攻国際文化研究科博士課程）

「戦後長崎における原爆意識」

- ③ 山田朋美  
（津田塾大学大学院国際関係学研究科博士課程）  
「戦間期日本におけるアイルランド認識」

### セッションG 越境の文学とコミュニケーション

- ◎ 司会 与那覇 恵子（名桜大学国際学群准教授）  
① 千 麗（龍谷大学国際文化学研究科博士課程）  
「異者の語りの二声構造—魯迅が漱石から学んだもの—」  
② 守屋貴嗣（法政大学大学院国際文化専攻博士課程）  
「詩誌『亜』について及び満州文学状況」  
③ 森田系太郎  
（立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科博士課程）  
「他者とコミュニケーションに謙虚さ：異文化から環境まで」  
④ 中村優子  
（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士課程）  
「自己/他者、アドベンチャー/アクティビティ：英日広告における自然のイメージと自然コミュニケーションの比較分析」

### セッションH 国際化時代と宗教

- 司会 山田 均（名桜大学国際学群准教授）  
① 金 美連（日本大学国際関係学部非常勤講師）  
「キリスト教信者の仏壇、焼香、墓への思い」  
② 本田 真（龍谷大学大学院国際文化学研究科博士課程）  
「仏教と環境問題についての研究傾向の推移」  
③ 川村明海（龍谷大学大学院国際文化学研究科博士課程）  
「ロシア・ウラジーミル教会群に見るライオンレリーフと二重信仰」  
④ 福田訓久（目白大学大学院国際交流研究科修士課程）  
「ポスト・カウンター・カルチャー期におけるナバホ族のアイデンティティ再構築：民族論、教育論を中心として」

### セッションI 望ましい文化遺産の継承

- ◎ 司会 上江洲 基（名桜大学国際学群准教授）  
① 関根理恵（筑波大学大学院人間総合科学研究科博士課程）  
「国際社会における文化遺産保護の歴史的経緯」  
② 山崎眞次（早稲田大学大学院政治経済学術院）  
「クアテモク銅像の移転問題—住民運動と文化行政の関係から」  
③ 屋宜盛弘  
（沖縄小林流小林館協会儀保道場副館長、教師7段）  
「沖縄伝統空手の根本思想—争いを好まない心」  
④ 劉 榮純（プール学院大非常勤講師）  
「日本におけるマイノティーの結婚」

### セッションJ 国際政治分析の視点

- ◎ 司会 ドナルド・シーキンス（名桜大学国際学群教授）

- ① クインミン・フン  
 (名桜大学大学院国際文化研究科修士課程)  
 「1980年代のベトナムとビルマの人間の安全保障に  
 関する比較」
- ② 柴 理子 (東京情報大学情報文化学科講師)  
 「メディアの中の『東欧』～明治期の新聞報道を手  
 がかりに」

**セッションK 舞踊、映画の社会的貢献**

- ◎ 司会 花城 洋子 (名桜大学人間健康学部准教授)
- ① 佐和達児  
 (立命館サステイナビリティ研究センター研究員)  
 「サステイナブルな社会に向けての芸術文化の担う  
 役割とは」
- ② 杉村使乃 (敬和学園大学人文学部助教授)  
 「写真週刊誌 Picture Post の表紙に見る第二次大戦下  
 の女性像」
- ③ 岡崎淑子 (聖心女子大学歴史研究学科教授)  
 「ディアスポラ・アーティストの体験と貢献ーカンボ

ジア舞踊家ソフィリン・チアムス・シャビロの活動」

- ④ 川村湊 (法政大学国際文化学部教授)  
 「スクリーンに浮かぶ沖縄ーオキナワの表象」

11:30-12:15 総会

12:30-15:00 シンポジウム

<< 国際化時代における「琉球（沖縄）文化」の地域  
 性と普遍性 >>

- ◎ 司会 仲地 清 (名桜大学国際学群教授)
- ◎ パネリスト 比屋根 照夫 (琉球大学名誉教授)  
 「伊波普猷と日琉同祖論」  
 比嘉 幹郎 (沖縄県アメリカ協会会長)  
 「沖縄文化に対するアメリカのインパクト」  
 高良 勉 (詩人)  
 「反復帰論と独立論の系譜」  
 内間 直仁 (名桜大学国際学群教授)  
 「琉球方言を通してみた沖縄文化」



名桜大学キャンパス空撮写真

## シンポジウム報告

2007年度大会会場でもある沖縄県名護市の名城大学総合研究所において、2007年2月1日(木)午前10時より12時まで、「学問としての国際文化学」をテーマとして日本国際文化学会(沖縄シンポジウム)が開催されました。司会は松井賢一(龍谷大学)先生、パネリストは平野健一郎(早稲田大学)、熊田泰章(法政大学)、仲地清(名桜大学)の3名の先生でした。今回はその中から、熊田泰章先生のを改稿していただき、ニューズレターに掲載することにいたしました。

### 学会誌から見る国際文化学

法政大学国際文化学部教授 熊田泰章

2005年度・2006年度の日本国際文化学会・学会誌編集委員長を務めた経験を踏まえて、以下に短く、学会誌の現況から見るところの国際文化学について、報告することにしたい。

日本国際文化学会年報『インターカルチュラル』は、学会設立の最初から、この学会のアカデミックな活動の根幹を成すものとして、年1回、論文を中心にした学術誌として刊行するという方針が定められ、2003年刊行の創刊第1号から、2007年刊行の第5号まで、実績を重ねてきた。

この学会誌をどういふものとして作っていくかについては、常任理事会や編集委員会を中心に、学会の中で、様々な議論を行ってきた。その議論において、最初の大きな決定事項は、学会の会員にのみ配布するのではなく、書店で販売することである。その目的は、新しい学問である国際文化学とその学会を、少しでも多くの人に知ってもらうことであった。その際、根底にあったのは、国際文化学という学問に携わる当事者は誰なのか、国際文化学は誰によって営まれる学問であるか、という問いかけであった。大学という機関・組織に所属する大学教員・研究者だけが営む学問ではなく、この学問が大学教授の狭いギルド的サークルに属するのではなく、その外に開かれた学問であるというのが、その答えであった。したがって、この学会は、会員になるための条件として、大学に所属する教員・研究者に限るという限定を設けず、国際文化学にかかわる者であれば、誰でも、学会の会員になることができるとした。もちろん、学部学生や大学院生も含まれる。学会誌を書店におき、書店で販売するものとしたのは、文化に関する学問であるからには、文化に関与する者に対して、学会を知らしめ、学会に加入する機会を学会の外に向かって作りたいたと考えたからであった。

さて、学会誌『インターカルチュラル』では、毎月10本前後の論文などを掲載している。それらの論文は、これまでのところ、2種類に分けられる。つまり、毎月、巻頭に特集があり、その特集の中の論文がその一つの種類であり、この特集は、これまでのところ、毎年7月に行われる学会の全国大会でのシンポジウムなどを学会誌に掲載して、今度は、読んでもらおうとするものである。もう一つの種類は、会員からの一般投稿論文となっている。

この2種類であるということは、そもそもこの学会誌をどのような構成で、あるいは方針で作るかということと関係している。学会誌を創刊するために議論を進める中で、特集を立てることについて、かなりの議論を行なった。その際に、編集委員会が積極的に特集テーマを定め、そのテーマを発表して論文の投稿を受ける、かつ必要に応じて特定の研究者などに執筆依頼をするというやり方が望ましいという考えがあった。それは、新しい学会の学問が今何を重要な研究課題としているかが良く分かるように特集テーマを提案して行く、という考え方である。しかしながら、この学会の今現在約400名の会員がそれぞれに進めている研究の多様であることを思うと、編集委員会が特集テーマを設定することは、多くの可能性があることで、逆に、なかなか絞りきれものではない、しばらくはテーマの提案を保留するという事になっていったという経緯がある。ただ、実際に、1号から5号の各号の編集を行うにあたって、それぞれの編集委員会は、今回のこの号の巻頭に置くべき論文は何か、ということ議論する際に、全国大会で成果を収めたシンポジウムを、その時に会場で聞くことができた聴衆による受容にのみ限られるのではなく、学会誌に掲載することで、より多くの今度は読者に読んでもらえる、また学会の活動の記録性を高める上でも好ましいとの判断で、掲載してきた、というのが実態である。これまでの5号の巻頭に掲載された、学会全国大会から採用されたシンポジウムのタイトルは以下の通りである：

- 1号＝「国際文化学」のめざすもの
- 2号＝グローバリゼーションと文化
- 3号＝ガヴァナンスと公共性 - 国際文化学の課題
- 4号＝ナショナリズムと文化
- 5号＝21世紀・グローバル時代の宗教・民族・国家・非暴力

この全国大会シンポジウムを学会誌巻頭に掲載することによって、当初、常任理事会で議論された、学会誌独自の特集テーマを設けて学会の取り組む研究課題を明示するという事は、結果的に果たされていると筆者は考えている。全国大会のシンポジウムのテーマ、内容を決定するに当たって、この学会が今シンポジウムの形で論じなければならないことがらを、その都度、探し出して決定しているのだから、それを学会誌に掲載することで、学会誌の特集テーマにもなりうる、というのは、当然のことであろう。ただ、今後、次の第6号以降では、編集方針をどうするか、再度議論する必要があると感じている。

さて、上掲の各号の巻頭特集のタイトルを改めて見直すことによって、この5年間、この学会がどのような研究テーマを重視してきたかが、それだけで見て取ることができると思われる。タイトルそのものが明らかにしていることは、私たちが、まさに「文化」を研究しようとしていること、そして、「グローバル化」との関わりとの中で考えようとしていることである。これが、この学問の課題であり、テーマであり、目的であるとして、しからは、それを論じる上での学問性はいかなることになっているのであろうか。そのことに言及していくために、やはり、学会誌第1号から第5号を参照することを続けたい。

この学会誌では、論文それぞれの最後に、その執筆者の専攻領域を執筆者の自己申告によって記載している。つまり、国際文化学を営むにあたって、どの分野をさらに自分の専攻としているかを記載しているのである。以下にこれまでのものを取り出して列挙してみたい。同じものを複数の執筆者が書いた場合には繰り返さず、また何らかの整理も施さずに、ただ列挙してみよう。

国際関係論・国際文化論/比較教育学/文化人類学/日本語教育/言語学/留学生教育/日本思想史学/東南アジア国際関係/近代フランス思想史/社会人類学/アメリカ文学・比較文化/国際資源政策論/アメリカ文学・演劇/高等教育制度・行政/日本文化論/異文化間教育学/社会言語学/国際関係論・政治理論/国際教育協力論/比較教育学/医療人類学・セクシュアリティ研究/日本思想史/日本文学/比較文学/国際文化論・近現代東アジア国際関係史/中国近代史/南アジア近・現代史/中東政治/日本近現代文学/日中異文化研究/日本学/多文化教育/国際関係史・国際移動論/アジア文化論・民族音楽学/資源政策学/思想史/宗教学/比較思想学・イスラーム学/宗教人類学/中東近現代史/キリスト教思想/イギリス・ロマン派文学/国際文化論・国際関係思想史/エネルギー経済学

まさに、多様としか言いようがないのであるが、これらの専攻の名指し方は、これらを名指した方々の学問性の拠って立つところを表しているのである。文化系・人文系の学問をそれぞれに営んでこられた方々が、それぞれ

の学問性を持ち込んできている段階であると考えられる。

最初に述べたように、この学会は、国際文化学を営む方々に対して開かれた学会であることを基本としている。学会に加入しようとする方が、国際文化学に興味関心を持ち、国際文化学の研究と教育、そして実践に寄与する意思のある方だということは、あくまで自己申告なのであって、その資格を査定する何らかの基準は定めようもない。研究を発表する際には、研究会の開催と全国大会の発表申し込みと学会誌の論文投稿に対する審査があるのみ。であるから、国際文化学の中で細分化された専攻を言うことへの規制はないのだし、何らかの規定化されて印刷された専攻名に丸を付けることはかけ離れたものである。全国大会での個人研究発表も、その分科会の名前が予め定められていて、そのどれかへのエントリーを求められるという申し込みなのではない。それぞれの会員が、それぞれの学問的経験によって、論文を書き、発表をしているのが今のあり方なのである。

そこで、ここでのまとめとしたいことなのだが、原因と結果の分析が逆なのかもしれないけれども、国際文化学とは、学会に加わって、今現在学会で活動する会員の方々の活動の総和としてできあがっていくものである、と言えると思う。あるいは、今我々は、そのような段階にあると言えるのだと思う。

そのような段階にあることによって、現実の問題になるのは、実は、何よりも学会誌の編集である。細かなところでは、論文に書き込む注の書き方をどうするか、ここからしてすでに問題になる。さらには、学会誌に限らず、個々の研究発表を理解しようとする時の聞き手・読み手側の困難であり、発表する側が受け手をいかに想定するか、その難しさである。論文をどのように書き、あるいは、どのように口頭発表するかは、この学会に所属するより前に既に我々はそれぞれに経験を積み、その経験とそれぞれの専門の約束に従って行うことを骨身にしみて学んで、この学会へと参集してきている。その限り、こと発表の仕方については、それぞれの学問的出自によって相違するところがあることにいらだつのではなく、それでもなお共通の知のあり方を模索するしかないと考えるのである。

## あとがき

本年度より事務局が法政大学に移り、熊田泰章会長以下、役員、理事も新体制となりました。学会発展のため、微力を尽くす所存です。今回のシンポジウム報告は、熊田先生の報告しか掲載できませんでしたが、テーマは学会の根幹に関わるものであり、会員の関心も高いと思います。次号には平野先生、仲地先生の報告を掲載したいと考えています。

シンポジウムが開催されたのは、2月初めでしたが、名護城趾周辺の寒緋桜が満開でした。様々な伝統文化を残しつつ、一方で基地移転問題などで揺れる町でもあります。本年度大会への奮っての参加をお願いいたします。

ニューズレター編集責任者：神戸大学大学院国際文化学研究所 木下資一